

LEGEND prologue 伝説の衝突  
Encounter of Legend



レジェンド オブ ワールド

# LEGEND of WORLD

The story of the encounter

## Encounter of Legend ～伝説の衝突～

---

キャメロット。それは中世イギリスにおいてログレスの都。

ウーサー・ペンドラゴンが統治するこの都はその気候と恵まれた土地により周りの国よりも栄えていた。

そのためもあり、数年に烏の洪水の如くアングロサクソンを元とする周囲の者達はその土地を求め襲撃してきた。

だが、その度に伝説の魔術師マーリンの助言のもと追い返してはいたのだが、今となってはそれも昔の話である。

というのもその当人であるマーリンは愛すべき娘のもとへと行ってしまったためである。

そのため今何者かが襲撃してきたとなるとそれは大変なことであることはキャメロットにすむ人々全てが実感していた。

「5年程前、マーリンは私にこう告げていた・・・・・・・・

来る日、この都に娘が訪れよう。それも"魔法で若く見せている"娘。

その娘は都をととても大きく変動させるだろう・・・・・・・・。すなわち災厄。」

ウーサーは深いため息をついた。もし彼の助言が本当になってしまえばこの都はどうなってしまうのだろうか？

やっとの想いで造り上げた黄金の都キャメロットをそう簡単に失ってしまっは元も子もないではないか。

そうだ。最高の剣術力をもつランスロットと剣の技は強引ながらもその力は上の者にも劣らぬガウエインを呼ぼう。

彼らなら何か対策を提示してくれるかもしれない。

「参りました。今日はどのような用件で?今晚の祝宴についてでしょうか?」

ほっそりとしたしかし女達を魅了するような声でランスロットが訪ねた。

「そのことはモルガーナとそのお付きの女達に任せてある。

彼女らの作る料理は宮殿のシェフが作る食事よりもうまい・・・・・・・・

っとそんな話をしにそなたらを呼んだわけではない!

しかしガウエイン先ほどから何をそんなに綻んでいるのだ」

ガウエインの口が引き締まる。

「ああ・・・・・・・・これはすみません。」

先ほど来る途中アーサー殿に出会いましてな  
なんと白く美しいおなごを連れていたのですよ。  
これはもしやと思ひまして・・・・・・・・」

「ふむ。アーサー・・・己にはグウェンという女がいるというのに」

「はっ はっ せいっ はっ!!」

澄み渡る青い空の下で剣術の練習をしている少年の名は・・・・

「きやああああああああ!!!!」

甲高い声とともに何か白いふわふわした物体が空から降ってくると思っていると・・・  
どしんと少年の上に落下してきた。なんて激痛なのだろうか少年は思う間もなく気絶した。

「いやあ〜びっくりしたあ!!何なのよいったい。竜巻に飲み込まれたと思ってたら  
なぜか生きてるしふわふわ飛んでれば急に竜巻消えるし・・・・」

そんな愚痴を言っているうちに幾分たったのだろうか。そんなこと気になり始めたのは、下半身に何か違和感を感じたからである。

少女は寒気がしたので嫌々ながら下を覗いてみると・・・そこには少年の姿が見えた。しかもある意味死にかけ。



「きゃあああ!!ひっ人が!!男の子が誰かのせいで死にかけてる!!」

本日二度目の悲鳴を上げながらさっと立ちあがったと思いきや少年を殺しかけたのはいかにも他人のように振る舞うのは

アメリカのカンザス州から竜巻によって運ばれてきた少女ドロシーである。皮肉にも彼女は天然である。

そんな彼女の言葉だけは幸い?にも少年のの耳に届いた。

「なっ あっあんたねえあなたが僕を殺しかけさせたんですよ。それにここは森の中。  
そんなウソつかなかなくても誰も見も聴きもしませんよ。」

顔を赤らめるドロシー

「ごっごめんなさい……。お怪我はありませんでしたか?」

「……………」

「へ? 私変な事いいましたか??」



少年はジトーとこの天然なドロシーを見つめた。そして深呼吸(まだ奥で痛むのを感じながら)すると、

「まあいいです。僕の名前はアーサーといいます。

あなたは何と申すのですか?それと失礼かもしれませんが何者ですか?

空から降ってくるなんて・・・・・・・・」

「?私はドロシーよ!!空から降ってきたのには分け合ってかくかくしかじか・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・そんな事があったんですか。信じ難い話ですがね。でもまあ貴方が遠くから来た旅人の様な者であると言う事には変わりはないですし、これからの当てもないと言う事で・・・・・・・・どうです?僕の”王宮”へ一度来ませんか?きっと私の父上が何か考えてくださいますよ。」

ドロシーはくすくすっと笑った。

「貴方のおうきゅう?何冗談いつてんのよお。もし王宮の事言ってるんだったらそんなのとうの昔に無くなっているじゃないですか!」

目の前にいるこの女はさっきから色々な意味でおかしい・・・・・・・・落下した時の衝撃で惚けてしまっているのか?などとアーサーは考えたが、そこはさすが未来の

王。こういつてケリを付けた。

「まあそちらも色々あるんでしょうね。今夜は王宮で祝宴があるので楽しんでくださいよ。ね?」

「・・・・・・・・?」

今度は目を真ん丸にしながらドロシーが首を傾げたが、アーサーはそんな事気にせず緑生い茂る山を早歩きで下り始めた。なぜ早歩きかというのは、自分の手ではこの娘の手を負えないと確信したからである。こんな事はランスロットのほうが得意そうである。いや、絶対得意だ。

段々と厚く灰色の今にも雨を降らせでもしそうな雲が覆ってきた空を見つめながら下っていると、間もなく家々の集落が見えてきたその奥には周りを頑丈な壁で覆った大きなお城。そう。いわゆる城下町だ。ドロシーはこの光景を見たときは戸惑ってしまった。無理もないだろう。しかし天然である事がここで幸いしたのだろう、すぐに何となくそれなりの理由を自分に言い聞かせ納得したのである。

「素敵い〜!貴方がさっきいった王宮って本当だったんですね!」

「信じてもらえてうれしいです。さあ、ようこそ!我が都キャメロットへ!」

城下町には、普通の民家もあれば食材から武器まで様々なお店が立ち並んでいて空に広がる曇天とは裏腹に賑やかだ。とくに洋服屋なんかは沢山の貴婦人でいっぱいであった。今夜の祝宴のための洋服をこしらえるためであろう。

こんな光景に心を躍らせていると、目の前にはすぐさま首が吊りそうなほど高い壁が広がった。壁の中央にはこれまた大きな門と番人の姿。アーサーが手で挨拶をすると、門は開かれ内部の立派な中庭がお披露目された。中庭の中央には大きな噴水がありそれを取り囲むように葉を生い茂らせた木が植えられていた。何とも宮殿である。そのままアーサーに宮内へと連れて行かれると豪華に宝石をちりばめられたこれまた大きな扉が現れた。

「父上。ただ今戻りました。」

「おかえりアーサー。おや、ガウエインの言っていた通り確かに連れておる。その隣にいるおなごはどなたかね？」

「このおなごとは剣術の稽古中に出会いまして。しかしながらとある事情で路頭に迷っている状況なのです。」

「ふむ。それは御気の毒様。それで用件は？」

「はい。そこでこのおなごをここにある程度の目処がつくまで預かってやってはいただけないでしょうか？」

「・・・うむ。確かに前のお前の用件を却下する行為は騎士道に反するな。良かろう。丁度部屋はいくらでも空いている。好きところで寝泊まりしなさい。」

ドロシーはこの一つ一つ型にはまっている情景に見入っていたので、会話を良く聴いていなかった。だが、何となく自分の事で交渉してくれている事はわかっていたので、

「ど・・・どうも、ありがとう、ございます・・・!えっと、あの、、、」

「はっはっは そう肩肘を張らなくてもよい!我ら騎士にとって当たり前のことしているまで。どうかゆっくりして行ってくれたまえ!」

無事用事が済み、一段落すんだ所すぐに夜がやってきた。あいにく外は大雨だが王宮内は関係なし。民衆から王宮貴族まで皆でわいわい騒いでいる。

「さっきはありがとうアーサー君。あの、ちょっと訊きたい事が・・・」

「何だい? それと、どうだい? これから長らく一緒の生活なんだしもう少し気軽に話をしようじゃないか!」

「そっそれもそうね!それでなんだけど・・・今って、時代でいうといつ位になるの?」

「え?それも分からなくなってしまったのかい。今は五百と十五年さ。」

「!!! やっぱり・・・。台風に連れてこられた時点で変だと思ってたけれど、どうやらアーサーと



かランスロットとか聴いていると過去にタイムスリップしてしまったみたいね。・・・なんだかどこかで聴いた事があるような出来事だわ・・・」

「・・・なにをブツブツ言っているんだい？ この先の事ならもう大丈夫なんだから目一杯楽しもうじゃないか!」

「ア～サ～!! 私のダーリン～♡」

突如、人前で大声でこっぴどかしい事を叫んで来たのは、ウォード出身でアーサーの未来の妻であるグウェネビアである。彼女はとても美しいため自分に酔っているらしく大胆な服を着る事が多い。女性があまり得意でないアーサーにとっては色々な意味で危険な人物である。そして、この彼女と別の男がとある事情で恋に落ちてしまいこの都にとって第二の危機をもたらしてしまうのはまた先でのお話。

「グウェン!! お願いだからそんな大声でいわないでおくれよ! こっちはとっても恥ずかしいんだから・・・」

「そ・ん・な・こ・と、言わないの♡っむむむ! アーサー。その隣にいる私よりは奇麗じゃない女はだれかしら?」

「あっああ、こちらわね・・・ぐふうああああ!!!」

「なんにが『こちらわね』よ! 気軽にほかの女とイチャつかないで! その女も女よ!! 私とアーサーが許嫁だって知ってるのに誘惑???'」

「あわわわ、ごっごめんなさい! 差し障りがあったようですね。すぐにこの場から消えますんで!」

「しっしっしい～!! 二度と近づくなあ～!! ふう。追っ払ったわ。ア～サ～♡どう? 私って勇敢な女でしょ!! さあ、一緒に食事でも・・・」

グウエンの目線の先には無様にも顔から突っ伏しているアーサーの姿があった。

さて、ドロシーの方はこれまた素敵なベランダにいた。雨が時々顔に当たる。同時に何かもどかしく寂しい感情が沸々とわいてくる。何気なく側にいたトイプードルのトートーはそんな彼女のために何かできまいかとうろろうり回りを回っていた。

トートーが一回りするごとかのように風が次第に強まってくる。

っとその時、ドロシーの横を荒しの如く何か黒紫色の布のような物が通った。その風のような物は宮殿内に入るやいなや辺りにある豪華な食材や装飾品を全て台無しにしていった。会場の人々は大慌て。ウーサーは警備員にすぐさま誘導命令を出したがそう簡単にはいかない。たとえ大きなドアだとしても、大勢の人々が一斉に外に出られず、押せや引けやの大騒ぎ。これを見た風のような物は・・・いや、”者”は卑怯なカラスのように笑い出した。

「ははははは♡マーリン。アンタがいったた王宮ってのはこれの事かい!! お前さんが話してくれたように確かにここは暖かい場所だねえ～。だが、これから氷河のように氷付けにされちゃうのだからあなー」

ウーサーはとうとうこの時が来てしまったのかという想いで一杯になった。

「おっお前はまさか・・・。」

「ハァーイ。 ご機嫌いかがかしら？ フフツ♡ まあこんな様子じゃ憎悪の念でいっぱいだろうけど。」

「ランスロット!! ガウエイン!! 頼む。 奴を止めてくれ!! 他の部隊も計画通りかかれ!!」

「まあ。 私のために用意を!! それはうれしい♡ さてどんなおもてなしかしらん？」

ランスロットは部隊を三つに分け三角形を作るように配備させると、ガウエインと共にそのしなやかな剣術と豪快な力で攻めはじめた。ランスロットの剣が”者”を包んでいる布を切り裂く。すると、そこから顔を出したのはとてもこの世の者とは思えないほど誘惑に満ちた女の顔であった。これを知ってしまっはもう迂闊に攻撃できない。騎士道に反するからだ。

「どうしたの？ もうおしまい？ それじゃあコチラからもお返しをしてあげるわ」

そう女は言うど、辺りの大気が疼きはじめた。この見た事もない光景はすぐに好奇心から悪夢へと代わる。

「この世に君臨する七十二の魔人とその精霊!! この杖を糧として我に力を与えよ!!」

女の手にする杖に何とも美しい光の粒が集まると、色は次第に深紅に染まりはじめた。そう。この女は”<sup>メイガス</sup>魔女”なのであった。



???

>

TO BE CONTINUED

## LEGEND of WORLD ～the story of the encounter～ prologue 2

<http://p.booklog.jp/book/37305>

著者 : livesonic

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/livesonic/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37305>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/37305>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社 : 株式会社paperboy&co.